

ハイブリッドオーケストラの現状紹介（２）
－第３期に入る韓国の室内オペラ界とエレクトーン－

音楽の世界

Monthly journal "The World of Music"

1963年10月14日第三種郵便認可
第53巻2号 通巻556号
2014年2月1日発行
(毎月1回1日発行)

ISSN 1342-5463

音楽家が自ら作るマンスリージャーナル

2014年

2月号

特集

《歌は世につれ
私の歌謡曲史(下)》
(助川敏弥・佐藤光政・橘川琢)

グラビア 日本音楽舞踊会議 新年会

論壇 音楽大学学生とキャリア(就職) 阿方 俊

リレー連載 未来の音楽人へ(11) 北條 直彦

連載

歌の道・我が音楽人生(2) 久住 祐実男

音・雑記—ひなの里通信—(65) 狭間 壮

名曲喫茶の片隅から(46) 宮本 英世

音盤奇譚(51) 板倉 重雄

福島日記(27) —最終回— 小西 徹郎

電子楽器レポート(13) 阿方 俊

明日の歌を(第9回:渡辺宙明-5) 橘川 琢

計報 クラウドイオ・アバト/今井重幸 編集部 他

コンサート・レポート 声楽部会 「2014年新春に歌う」

コンサート案内 麦の会 チャリティーコンサート 武田 和久

時評 小野田寛郎さんの逝去とオウム裁判の再開 日野 啓太郎



東京 サントリーホール



2～3ページ：記事（雑誌では白黒のためカラーの原稿）

4～7ページ：オペラおよびハイブリッドオーケストラ関連写真

ハイブリッドオーケストラの現状紹介（2）
 - 第3期に入る韓国の室内オペラ界とエレクトーン -

阿方 俊

沖広治という名前はオペラ関係の人以外にはなじみが薄いですが、彼は日本音楽舞踊会議声楽部会の佐藤光政さんをはじめ、オペラ界の第一線で活躍した人を顕彰するためにジロー・オペラ賞を25年間（1973～97）にわたり贈り続けた人である。同時に日韓のオペラ交流にも長年尽力しており、エレクトーンを韓国のオペラ界に必要な楽器として積極的に紹介した人でもある。



奇しくも今年沖氏が最初にエレクトーンに出会ってから25年目になる。彼がこの楽器に注目したきっかけは、東京室内歌劇場の「サマー室内オペラ公演」にはじまる。1990年8月1～5日、新宿モーツァルトサロン。これは、日本のプロのオペラ団が最初にエレクトーンをオペラに取り入れた記念すべき公演である。左は、当日のプログラム表紙。

ここでは喜歌劇二題と表して、ヴォルフ・フェラーリの“スザンナの秘密”とペルゴレージの“奥様女中”が上演された。前者はエレクトーン2台（赤塚博美、柴田薫）、後者は日本コンサート・アカデミー・弦楽カルテット、エレクトーン（海津幸子）とクラヴィノーバによるハイブリッドオーケストラが演奏。また、ここでは日韓の歌手が出演しており、後述のイ・ウン

スンさん（二期会会員。最近指揮者としても活躍）も“スザンナの秘密”のタイトルロールを歌っている。

これが縁となり韓国でエレクトーンを用いたオペラの企画がいくつか持ち上がったが、当時、エレクトーンは日本製の自動車と同様に韓国への輸入禁止製品であったため、この楽器を用いたオペラは不可能に近いものであった。紆余曲折の末、1995年、敬虔なカソリック教徒であった沖氏が韓国の教会へ2台のエレクトーンを寄贈し、それをソウル室内オペラアンサンブル（チャン・スドン主宰）が借用するという形でエレクトーンによるオペラの門戸を開いた。1995年、芸術の殿堂実験ホール、プーランクの“声”とヴォルフ・フェラーリの“スザンナの秘密”を上演。

その後、1999年に韓国国立オペラ団、韓国室内オペラ連合会、韓国国立劇場の三者が中心となり、韓国文化芸術院やソウル市が後援する「ソウル国際室内オペラフェスティバル」が開催され、昨年、第14回を迎えた。

第1回目から第4回目までのエレクトーン使用の推移^{注-1}は次のようになっている。

年度	エレクトーンと演奏形態 *アンサンブルはエレクトーンのみを使用したもの
1999	8 演目全部が小編成のオーケストラでエレクトーンなし
2000	8 演目中 3 演目がエレクトーン使用。ハイブリッド×2、アンサンブル×1
2001	6 演目中 3 演目がエレクトーン使用。ハイブリッド×2、アンサンブル×1
2002	10 演目中 9 演目でエレクトーン使用。アンサンブル×9

注-1 昭和音楽大学「研究紀要」第22号46p.韓国における電子オルガン伴奏オペラからの抜粋

この間、2001年には韓国国立劇場で日韓オペラフォーラム、日韓ワールドカップが行われた2002年には、オペラではないが「日韓1000人の子どもの大合唱」(5月、ソウル世宗会館大ホール)で昭和音楽大学学生によるエレクトーンカルテットが伴奏で参加し、7月には平成音楽大学とイ・ミジョー舞踊団がソウルと熊本でエレクトーンデュエット(オム・ジンギョン、清水徳子)と共演。また8月に日立市で開催された第7回全国オペラフォーラムの「日韓親善オペラコンサート」では、ソプラノのイ・ウンスンとバリトンのチェ・チョンウに加え、韓国オペラ団のピアニストによるエレクトーンカルテットが演奏して注目された。

しかしこれらの発展半ばで、沖氏が2001年11月に帰らぬ人となった後、韓国の室内オペラ界は第2期を迎える。元国立オペラ団団長のパク・スギル氏を中心に規模は小さくなったものの室内オペラフェスティバルは継続され、昨年第15回を迎えた。その活動は、第10回目の時にKBS WORLDで取り上げられている。

第2期を象徴する動きとして、2003年にオサン市(ソウルの南西、バスで40分)で、元韓国国立オペラ団事務局長のキム・ムンシク氏とイ・ウンスン夫人などが中心となり立ち上げた韓国室内オペラ団の活動が挙げられる。この団体の若手オペラ歌手のためのサマーセミナー、韓国人作曲家のオペラ作品委嘱と初演、モーツァルトの四大オペラハイライト、ブリテンの作品の初演、日韓の合唱団による友好親善活動などに対して2012年には、子供と青少年のためのオペラ作品を取り上げて公演するユニークな団体として社団法人京畿芸術振興院加盟団体になった。

一昨年から昨年にかけての活動の中に、創作オペラ“私はイ・ジュンソプだ”、モーツァルト“フィガロの結婚”、モーツァルト“オペラハイライト”、ブリテン“ノアの方舟”“小さな煙突掃除人”などを、ハイブリッドオーケストラ、エレクトーンデュエットやソロで上演している。



“ノアの方舟”のステージ。6名のオペラ歌手と共演するオサン少年少女合唱団のメンバー

とはいっても韓国の音楽界がこぞってエレクトーンによるオペラを高く評価しているわけではない。また他のアジア諸国のように音楽大学に電子オルガン専攻(=エレクトーン専攻)が設置されていない。そのような状態を踏まえて、今後の発展のために指揮者と奏者のレベルアップを期して韓国室内オペラ団で指揮をしているイ・ウンスンさんが一昨年より、またピアニストのウォン・ヘリンさんが昨年より昭和音楽大学の研究生として研鑽をはじめた。

次々と新しい企画を出して推移していた第2期であったが、昨年5月韓国室内オペラ団の屋内骨であったキム・ムンシク氏の急逝は惜しまれる。

その後、一部の公演や演奏会は取りやめになったが、昨年11月にブリテンの“ノアの方舟”“小さな煙突掃除人”の公演、12月には成田楽友協会とJALの合唱団を交えたベートーヴェンの“第九”をハイブリッドオーケストラ(10数名の弦楽アンサンブルにエレクトーン)で演奏。これを聴いた、韓国国立オペラ団のパク・スギル元団長が「エレクトーンは韓国のオペラ界で有用な楽器として認知された。今後の課題は音大で演奏者をどのように養成していくかにかかっている」と語ったが、まさにこのコメントが第3期の大きなポイントになると思われる。

(あがた・しゅん 本研究会員)

オペラおよび電子オルガン関連写真

- ・イ・クンヒョン「私はイ・ジュンソップだ」 の練習風景とステージ
- ・モーツァルト「フィガロの結婚」 ステージとカーテンコール
- ・B.ブリテン「小さな煙突掃除人」およびB.ブリテン「ノアの方舟」のステージ



イ・クンヒョン作曲「私はイ・ジュンソップだ」 ステージ



2013年3月23日・24日 韓国国立劇場小ホール
イ・クンヒョン作曲「私はイ・ジュンソップだ」のハイブリッドオケ練習風景



同 上



写真左：キム・ムンシク（演出家） 同右：イ・クンヒョン（作曲家）



2012年8月 韓国国立劇場小ホール 韓国室内オペラ団「フィガロの結婚」
イ・ウンスン（指揮者）、指揮者の左＝市川侑乃、指揮者の右＝千葉祐佳



同上カーテンコール：写真中央＝イ・ウンスン（指揮者）、指揮者の左＝ウォン・ヘリン（エレクトーン＝チェンバロ）、指揮者の右2人＝市川侑乃、千葉祐佳



2013年11月2日 オサン文化芸術会館大ホール
B. ブリテン「小さな煙突掃除人」 子どもが多く出演
伴奏：韓国室内オペラ団ハイブリッドオーケストラ（エレクトーン＝海津幸子）



2013年11月2日 オサン文化芸術会館大ホール
B. ブリテン「ノアの方舟」 子どもが多く出演
伴奏：韓国室内オペラ団ハイブリッドオーケストラ（エレクトーン＝海津幸子）